

徳之島における伝統的信仰

——伊仙町を中心に——

高野 洋 志

岡山理科大学総合情報学部

(1998年10月5日 受理)

I 聖地の外観

徳之島南部は琉球石灰岩と呼ばれる隆起さんご礁の厚い地層におおわれており、起伏の多いカルスト地形が、徳之島中央山地の裾から海にむかってゆるやかに傾斜している。川の周辺は深い谷となることが多く、しばしば地下に伏流する。いまでこそ、島を一周する海岸に近い県道沿いに人口が集中する傾向にあるが、内陸部にも集落は点在する。

① 聖地とその周辺

検福穴八幡は、検福の集落から1 kmほど上手にある鍾乳洞である(写真1)。一般にこの地方では鍾乳洞のことを、暗い川という意味でクラゴウと呼ぶ。降りくちのそばには、白砂を敷いた祭祀場所がある(写真2)。

上面縄の坂元権現社は樹木に囲まれた崖の窪みにある(写真3)。このすぐ近くにはトүүл墓が2箇所あり、少し離れて上手には高千穂神社がある。集落の中心部には、ノロ祭祀に関係していた場所が2箇所あり、それぞれゲートボール場と上面縄保育園になっている。

アガレンヤマは、東伊仙の聖地である。古木に囲まれた祠には、長いひげをもつ人物の坐像が安置されている(写真4)。この場所の近辺からは焼き物の破片が多く見つかり、少し離れて取り囲むように集落が形成されている。

伊仙町で最も規模の大きな聖地、義名山は、町役場のある伊仙集落の上手にある。現在の義名山は南北に中央部をつらぬく道路をはさんで、西側が運動公園に、東側が、禅宗の寺跡といわれる石積みのある小丘に隣接する、義名山神社(写真5の由来書きには、別の場所にあった高千穂神社が、明治23年に倒壊したので、この地にあった八幡神社に合祀し、儀名山神社と改名したと書かれている。)となっている。また北東部の山中にはゴミ処理場がある。

中山(ネーマ)集落の西の山中に、古木に囲まれた祠があり(写真6)中山神社と呼ばれている。内部には赤みがかった石数個とサンゴ石が置かれ、すぐ外にも平たい石が置かれている。この場所にまつわる伝説については、後で触れることにするが、100mほど離れた山の中腹に洗骨後の頭骨を安置した墓があり、その先には伝説にでてくる川がある。

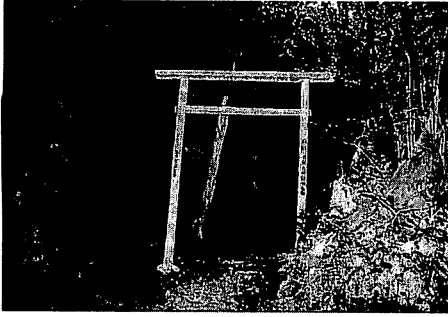


写真1 検福穴八幡



写真2 穴八幡入り口近くの Amtogashi

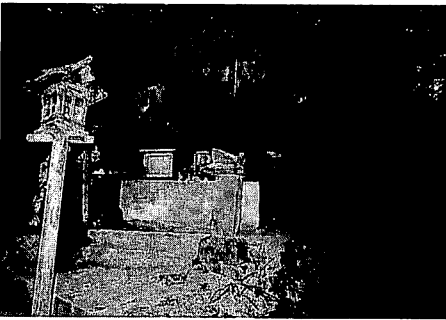


写真3 坂元権現社



写真4 アガレンヤマの祠



写真5 儀名山神社の由来書き

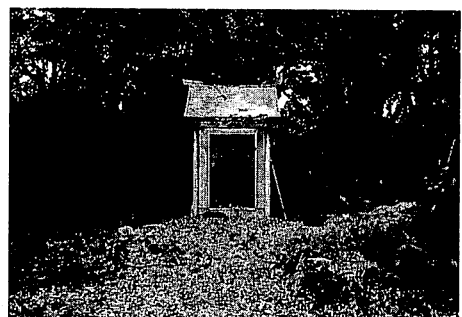


写真6 中山神社

犬田布のミョウガン神社は、集落の上手にあり一帯がミョウガンの森と呼ばれている。社の後方の丘がグスクで、最も高いところをとりまくように石垣がある。その近くの岩かげなどがトゥール墓（洞穴墓を地元ではこう呼ぶ）であったり。

県道に接する河地集落の拝所は、中森八幡と呼ばれ林の中に、ガジュマルの古木が立ち石が並べて置いてある（写真7）。この場所の道路を挟んだ向かいには現在閉鎖中の保育園がある。河地には、殿敷八幡と呼ばれた拝所があったが、小学校が建てられたために、その脇に移された（写真8）。



写真7 中森八幡



写真8 殿内八幡

伊仙町の中では最も西にある小島には、鍾乳洞がある。その入り口は台地から30mほど降りたところにある。降り口の近くには道が広がった場所があり、その20m先にイシンミチまたはテラと呼ばれる拝所がある。道に隆起さんご礁の岩盤が露出しており、イシンミチ（石の道）という名の由来となっていると思われる。拝所の外観はこんもりとした樹木に覆われた小丘である（写真9）。道から入ると中央部に向かって10mほどの坂道がつけられており、最も高いところは、石灰岩が3方を囲む高さ1.2mほどの屏風状になっている。なかに20cmほどの白っぽい卵型の石が置かれている（写真10）。鍾乳洞への降り口と空き地をはさんで反対側の道を降りていくと、牧草地になっている。この場所は周囲を樹木と草でおおわれた石灰岩の壁で取り囲まれており、くぼみや洞窟状態になったところが何箇所もある。特に一箇所は、前面に高さ1mほどの石積みが築かれており（写真11）、奥は8分どおり土でうまっているが、大きな穴がある。この牧草地の周囲はかつてのトゥール墓地帯であった。

信仰の場所の入り口に鳥居が立てられてはいても、奥に神道様式の社が作られていることはまれで、小屋か祠が普通であり、河地の八幡神社については、鳥居も祠もなく、ブロックといくつかの石がおいてあるだけである。

このように、神社または拝み場所、寺跡または「テラ」と呼ばれる場所、グスク、トゥール墓と呼ばれる古い風葬墓、そして学校、公民館、義名山の運動公園などの公共施設や広場の存在、これらのすべてまたはいくつかの組み合わせが、かつての集落全体の信仰を集めた聖地の外観といえる。

② アムトガナシ

徳之島の民俗研究に大きな貢献をした徳富重成氏は、サアムト、ザムト（「座元」とは同族、同業集団の中心的家系）とアムトは同じであると結論づけているが、他に、アムトは火を意味するアトムト（元）で、家系の火の神を意味するという説もある。

伊仙町上面縄地区のアムトガナシのうち貞家にあるものは庭に接する林の中にあり、石を3個組んで置いた、「竈神」のかたちをとっている（写真12）。栄家の裏手にあるものは、



写真9 小島イシンミチの外観



写真10 イシンミチ内部の拝所

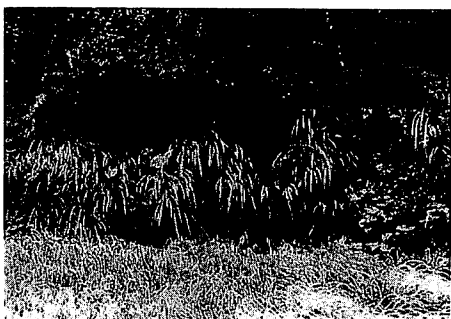


写真11 イシンミチ近くのトゥール墓



写真12 貞家のアムトガナシ

鳥居のそばに白砂が敷いてあるだけである。池田家の所有する林内にあるものは、2個の黒味をおびた石が、白砂の上に置いてある(写真13)。これらは個人の所有地内にあり、森や古木は周囲にない。

東面縄の海に近く、かつてアムトガナシ、ノロ久目それに弁財天を祀っていた場所があるが、現在伊仙町の保健センターとなっている。面縄地区の古里集落のアムトは、集落全体の信仰を集めるようになったということである。県道沿いの保育園の敷地内にある(写真14)。

参考までに、徳之島町井之川のアムトガナシは、家の敷地入り口の木の下や(写真15)、住宅地の一角にあり、白砂を敷き小さな石が置いてある(写真16)。

アムトガナシではないが、センテドゥと呼ばれる拝所が上面縄集落の上手にある。樹木が茂った中に岩が露出している。奥の岩のくぼみがかつての風葬墓で、前面が祭壇となっている。

II 聖地にまつわる伝承、歴史的事情など

① 起源にまつわる伝承

喜念権現は集落の上手の洞窟にある。伝説が二つあり、ひとつは人に顔を見られるのを



写真13 池田家のアムトガナシ



写真14 面縄古里のアムトガナシ

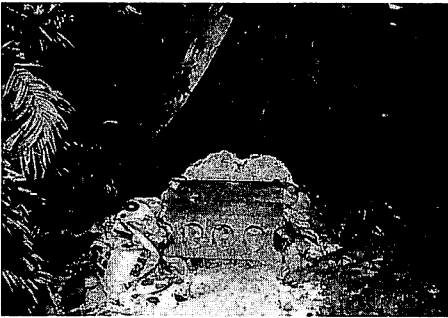


写真15 徳之島町井之川のアムトガナシ①



写真16 井之川のアムトガナシ②

きらった美女が、待構えていた青年にみられてしまい、洞窟の中に身を隠しそのまま権現の神となったというもの。もうひとつは、集落の美女が、代官に、在任中の島妻となることを求められ断ったところ、家族がおどされたので、洞窟に入って命を絶った。その霊を権現さまとして祀るようになった、というものである²⁾。もとの宗家は与名嶺、屋号が米真殿地だといわれている³⁾。屋号に殿地が入るといことはノロ祭祀との結びつきがうかがわれる。

同じ権現でも上面縄の坂元権現社に起源については、面縄地区のノロを邪教として、薩摩藩に訴えて廃止させた役人が、自分の妻が面縄の人でノロに仕えていたせいとか、廃止したかわりにと弁財天堂の神を分祀してもらおうようよりはからった、という伝承がある⁴⁾。

検福の穴八幡についての伝説は、起源に関するものではなく、祀られている神の威力についてのエピソードである。ここに女神を祀っていることをきいた薩摩藩の役人がたわむれに男根をかたどった花瓶を奉納したところ、神の怒りにふれて、帰国の際に遭難しただけでなく、その子孫にも祟りがあったとされる⁵⁾。

義名山神社一帯の聖地には、12～13世紀に沖縄から渡来したといわれる名真家の祖先の家系が深くかかわっていることが、この家系に伝わる文書を研究した穂積重信氏によってあきらかにされている。この文書は明治36年頃鹿児島県大島支庁の担当者に提出する嘆願

書下書きと同時代の遺言書からなる。穂積氏は嘆願書の内容を次のように要約する。

①私の名は「名真南京」といい、先祖は目加呂衆之前と天女⁶⁾に始まり、代々嫡子は南京と名のってきたこと。②それ故、代々名間山⁷⁾に鎮座する「南京神様」⁸⁾と「みくぐの神様」⁹⁾を祀り、お宮等も造営して来たこと。③そこへ、「御八幡十八神様」¹⁰⁾がやってきて御合祀なされるようになったこと。④先祖の取り仕立てた本村溜池及び楨川永水は、伊仙村中の田地用水はもとより飲料水にまで利用されて今日に至るまでも貢献してきたこと。⑤先祖代々続いてきた里主が廃止されてからも内々に義名山神宮はもちろん、「名間山御宮」も自費で修理を加え寄進してきたこと。⑥ところが、明治27～8年頃まで大変な暴風の被害や流行病の禍にあたりして人々が困窮している。古老に聞くと、それは「世の中の大切な神様をおろそかにしているからだ。」と言っている。⑦そこで明治29年10月、1村協議の上総代人を選んで義名山神官御祭式を執行ったところ、その後、世間の景況万事繁栄にむかいつつあるようだ。⑧願くば『何とぞ特別の御はからいをもって義名山神官にかかる南京神様の祭りの元取りをご指名下さいますようお願いいたします。』伊仙村人民総代 昇 益時 他 13名¹¹⁾。

羽衣伝説はこの地区における稲作の起源を語っている。遺言のなかでは、家系の始祖が最初「名間山」に居を構えていた、のちに義名山の中内城（グスク）に移った、名間山には「目加呂衆之神」、「美ぐくの神」、「世之主の神」および「の呂久目の神」の4柱の神を祀っていて、毎月1日、15日および28日には、聖地の清掃と祈願をおこなっていたこと、また、「天降ろし」された米のお返しの儀礼が、義名城名間祖南京之神（目加呂之衆）と内地から来た人々の信仰の対象である八幡神もあわせて祀る義名山神社で、毎年元旦に行われていたことが記されている。

阿三集落の氏神の起源は、200年近く前にさかのぼるといわれている。直屋という人物が家を建てたとき、夢に「白髪の高貴な老人が現れて」神を信心すれば一家が繁栄すると告げた。翌朝林の中に入り竹を切っていたら、3本脚の小鳥のふしぎなふるまいに靈気を感じたので、その場所に祠を建て、大悲観世音菩薩とした。これが集落全体の氏神となった¹²⁾。

中山神社の起源伝説には、犬田布のミョウガン神社が関係する。中山（ネーマ）のキサドンというテラにいたミャルという美しい女神に、犬田布のミョウガンテラにいるヌルクンガナシという男神がほれて、夫婦になってくれといったところ、彼女は1千夜自分のところに通ってきたら夫婦になることを約束する。毎晩2里半の道のりを通いつめて、いよいよ最後の晩というときに、女神はサビチ川にかかる橋に通ったら落ちるように細工をしておいた。男神はそれを知らず渡って川に落ちるが、助かって女神のところにたどりつく。女神は「神であるから夫婦になれない」といってその証拠に炭火を手のひらにのせた。すると炭火は手を焼いてうらに通り、女神は死ぬ。実のところ彼女は、顔以外ウロコのはえた魚の精であったから拒絶したのだ¹³⁾、というものである。

一方、ミョウガンにまつわる伝説もある。琉球王朝の支配下にあった時代、犬田布の按

司の次女、コイちゃんは、美しいことで有名であった。琉球王の配下がこの地を訪れた際その美しさを目にし、王に報告すると、王は彼女を送るように按司に命じた。しかし、彼女がどうしても望まないで、仕方なく王の氣にいらぬよう焼き火箸で彼女の顔を傷つけた上で送ることになった。案の定彼女はすぐに、着物やノロの首飾りを与えられて親元に送り返された。面縄に帰りついたところで船賃を要求され、ある人に船賃代わりに砂糖を借りて支払ったが、今度はその砂糖代に王からのもらい物をすべて渡さざるを得なくなった。美貌も持ち物も失って絶望し、犬田布に帰る途中の鹿浦川に身投げして死んだ。戦後彼女につながる家系のものにさまざまな災いがあったので、易者にみてもらったところ、コイちゃんの霊のたたりだということであったので、かつて彼女の持ち物を得た人の子孫のところに行ってそれを見つけ出し、ミョウガンの洞窟に祀ったところ、災いは消えたとされる¹⁴⁾。

小島イシンミチのすぐ近くの鍾乳洞には、始祖伝説がある。大昔洞窟に兄と妹の神様がいたが、あまり暗いので通じあって子供が生まれ、徳之島の人々の祖先となった。またこの兄と妹は神ではなく鬼であったという説もある。こうして小島が始まりとなったので、10月の祖霊祭は、小島から亀津までが、亀徳から手々をまわって西阿木名までの地域より1週間早く行われるという¹⁵⁾。この鍾乳洞の水は産湯に使われ、そうすると大人になっても悪いクチ（呪い）に負けることが無いと信じられた。またこの鍾乳洞にはウナギが住みついでおり、それをとって食べると病気にかかると思われていたそうである。

喜念、中山および犬田布の聖地にまつわる伝説には共通点がある。ひとつは、主人公が女性であり、しかも司祭らしい点、もうひとつは、男にいいよられて拒絶し、最後には不幸な死に方をしている点である。またこれらの女司祭がほおむられたらしい — 伝承の表現では「神となった」とされる — 場所が今の聖地となったことが推測できる。

南西諸島一帯では、オナリ信仰とよばれる女性の灵力への信仰が強い。原型は、兄弟を守護する、姉妹の灵力の信仰であり、ノロの時代まで集落の祭祀を司るのは、首長の家系の女性であった。これらの女性を主人公とした伝説には、集落全体を守護する役割を果たすことと、集落の外や、ましては島の外の男と夫婦生活をいとなむこととは相容れないとする認識がみられる。また、不幸な死に方をしているので、供養を忘れ信仰を怠ると、障りが生ずると信じられていた。

② 信仰の重層関係

奄美諸島が大和朝廷と接触したことは「続日本紀」にも記録され、7世紀末から8世紀前半にかけて、繰り返し朝貢し、位を授けられているものの、宗教上の影響を受けたとは思えない。13世紀以降、奄美大島の平家伝説や為朝伝説などからすると、九州から武装した集団が折々南西諸島にやってきて、一時的に勢力をつくるか、定着した可能性がうかがわれる。しかしながら、伝説以外にこの当時の記録は無く、宗教上の影響を確かめる方法も無い。

13世紀後半から、南西諸島は沖縄本島に形成されつつあった政治勢力のもとに組みこまれていく。しかし、沖縄本島を統一した琉球王朝の支配が具体的に始まるのは、15世紀半ばからであり、聞得大君を頂点とする神女（ノロ）組織が作られ、政治的支配を支えた。これにより、支配下の島々における各集落の祭祀と信仰はノロ中心に再組織されていき、そのノロが中央（首里）と地方のあいだを行き来することで、沖縄の宗教文化が地方に広まったことが考えられる。首里における宗教施設は、聞得大君の拝殿を挟む儀保殿内と真壁殿内という2つの拝殿からなっていたといわれる。徳之島におけるノロ祭祀の施設も、ノロの祈願する場所としてのトネヤとノロを出す家系の親族が住む殿内からなっており、両方が広い公共地に囲まれていて、集落の中央部もしくは上手にあったようである。明治に入ってから、この公共地に神社が建立され、森が伐採されて学校や公民館などの公共施設が造られていった。

「伊仙町誌」によると徳之島では、全島民が、1736年に徳之島町（当時は「東間切」）井之川に建てられた安住寺（禅宗）の宗徒とされた¹⁶⁾。1745年から「宗門、手札改め」がはじまり、以降10年ごとに更新された。安住寺は、1744年亀津へ、そして1770年に義名山に移転した¹⁷⁾。島津氏による禅宗の強制は行政措置であり、布教の支援や教育面での配慮をとまなつたものではなかったようである。集落の信仰の中心地がテラとよばれるときに、葬礼や先祖供養の儀礼のイメージが仏教と重なり合っていることは確かであるが、実際に寺が建てられたことの無い場所でもテラと呼ばれる。小野重朗氏は、奄美大島の瀬戸内町に多くみられるテラヤマとゴンゲンヤマについて、「テラは仏教的な、ゴンゲンは神教的なたてものをつくったための名称であることは明らかである……テラは一般の寺または寺院といったものとは遠く、ごく小さなカヤ葺き小屋風のもので、多くは古い墓地の近くにあったものが多く、葬墓制と関係したことは、喜界島や奄美大島北部で風葬洞穴墓の中に納めた納骨厨子をもテラといっていることから知れよう¹⁸⁾と述べている。

小島聡禮氏は、沖縄のテラ信仰は、仏教ないしは権現信仰の普及にともなうて、琉球各地に広がり、その特色は、神体が霊石であることと祭地が洞窟であることだとする¹⁹⁾。また沖縄県下で権現またはティラ（あるいはどちらでも）と呼ばれている32ヵ所の統計的な調査を行った宮家準氏によれば、そのうち洞窟もしくは穴が16ヵ所、海岸が11ヵ所、祠のあるのが20ヵ所、骨があったり墓があったりするものが14ヵ所、石が置いてあるのは21ヵ所、他界の神と考えられているのは16ヶ所であった²⁰⁾。

沖縄の例をみるかぎりにおいて、小野重朗氏の主張するように建築物そのものの名称からきいてるとは考えにくい。徳之島では古い墓地（洞穴墓）の近く、あるいは墓地そのもので、樹木に覆われた、小高い、祖霊信仰の場所を指すことは間違いのないであろう。他にも、先祖の霊が、太陽のように子孫の住む地を「照らす」、という意味で、仏教が入る以前からの名称だという説もある²¹⁾。

こうしたことから、徳之島の伝統的信仰の特徴を把握するには、葬墓制と祖霊信仰の関

係を調べる必要がある。

III 葬墓制と聖地

Iで触れたように、伊仙町の聖地とされてきた場所の近くには古い墓地のあることが多い。酒井卯作氏によれば徳之島のみでなく、「奄美諸島の聖地のほとんどが墓地の性格から出発しており、そのほとんどの聖地に人骨がみられる。」²²⁾

集落の全体の最も重要な聖地が祖霊信仰の場であることは、神道における信仰の対象が多様であるのに比べ、南西諸島一帯の信仰の顕著な特徴となっている。しかし、内地にも類似の祖霊信仰のかたちが各地に残されている。鹿児島県のモイドン²³⁾、奈良市大慈仙町の村境にある「カンコの森」²⁴⁾などがその例としてあげられている。

小野重朗氏によれば、鹿児島島の薩摩半島にみられるモイドンは、「墓地の傍か近いところであって墓地にうめた祖先たちを祭る祭場であると思われる。祖先たちの身を埋めたいわげがれた場所をさけて」祖霊を祀った場所である。墓地とモイドンとの距離が1000m以上はなれているケースから墓地のなかにモイドンのあるケースまでいろいろだが、100m以上はなれているものが一番多い²⁵⁾。

一方「カンコの森」については「多分、村内の丘に葬地が決定する以前の、より古い葬地であったとみられる。村内に葬地が出現した結果、次第にカンコの森の葬地制は忘れられて清浄地化し、祖霊祭地とみなされるようになり、やがて入山すると、祟るなどというように、忌地化してしまった」と赤田光男氏は指摘する。その意味においては、モイドンもより古い葬地であった可能性が否定できない。

伊仙町の聖地の中には喜念権現、坂元権現社、ミョウガンなどのようにトүүл墓であったと思われる場所にあるものがみられ、中山神社と小島イシンミチはトүүл墓のすぐ近く、儀名山神社、アガレンヤマや中森八幡などの近くには少なくともはっきりとわかるトүүл墓らしきものはみあたらない。しかし、聖地自体が古い葬地であったことを否定することもできない。その場合には、トүүл墓以外の葬墓形態、複葬や両墓制の問題を検討しなければならない。

大林太良氏によれば、南西諸島においても様々な葬制があった。棺に入れて木にかけておく樹上葬²⁶⁾、モヤという小屋の中に棺を置き、腐敗し終わるのを待って改葬する例²⁷⁾などである。徳之島の場合、トүүл墓の前あるいはまわりに個人墓の墓地が発展していった様子がはっきりわかることが多い(写真17)。しかし、トүүл墓は、現在でも使用されている中山集落の場合のように、むかしから複葬の第二段階に利用されていたケースもわかっている²⁸⁾、一般的にトүүл墓が最も古い第一段階の葬地であるとは言えない。この改葬後の洞穴葬には、沖縄の亀甲墓のように母胎回帰的思想や久高島のような太陽が洞窟に沈み洞窟から出てくるというような観念が背景としてあっただろう。大林太良氏は沖縄の風葬は複葬の第一段階とみなすことができるという²⁹⁾。徳之島でも、洞穴葬にいたる前

段階として、風葬の習慣があった可能性が指摘されている²⁹⁾。その場合に風葬の場所は他界との境界線上にあった。やがて、風葬が違う場所での埋葬に変わること、かつての風葬場所が聖地となった場合もあるだろう。もうひとつは、聖地が墓地と離れている場合、両墓制の詣り墓が聖地の起源となる場合である。つまり墓域が広げれば、詣り墓を一箇所にまとめ集落全体の儀礼をそこで行うほうが合理的だからである。

伊仙町の鹿浦にある永家の守り神は、カンケデラと呼ばれ、高倉の立つ永家に対し、道をはさんだ反対側の、樹木と石灰岩の壁に囲まれた場所である。テラという名称からも、場所の外観からも、ここが家系の墓であったことは間違いない。また屋敷内の家系の祖先が葬られた場所を、屋敷神として祀る例は徳之島に限らず南西諸島一帯に数多く報告されている(写真18)³¹⁾。

このように集落全体の聖地から、ひとつの家系の聖地まで、葬墓制と大変深い関係があり、しかも古い葬地は特別な霊的空間であるために、あらたに入った信仰の聖地として生まれ変わる可能性をもっている。

IV 聖地と石

伊仙町の聖地、祠、神社や屋敷神には石が置かれていることが多い(写真19~23, 25, 26)。これらの石は凹凸の少ない自然石で、もろい石灰岩が置かれているのは、中山神社のみであり、しかもその石は赤っぽい砂岩のおくりに置かれていて正面からはみえない。また石の置かれていない例(写真24)では榊の枝と香炉がわりの茶碗が置かれていたりする。

奄美大島南部でイビガナシとよばれてミヤなどに立っている石(写真27~32)とは、形状も扱いも大きく異なる。瀬戸内町のイビガナシの場合、個性的な形で、単独か1対で下は地面や床面に埋まっている。伊仙町の聖地ではひとつまたはいくつかの石が無造作に置かれているようにみえる。ただしアムトについては貞家のもののようにはっきりと竈神を表現する形をとるところもある。

これらの石はどこからとってこられたのであろうか。島の周囲の海岸をとりまく、隆起

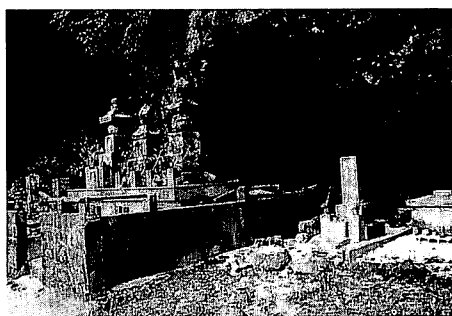


写真17 面縄の墓地



写真18 徳之島町井之川の屋敷神の例



写真19 面縄、殿内あとの屋敷神の石



写真20 天女が住んだとされる場所の石

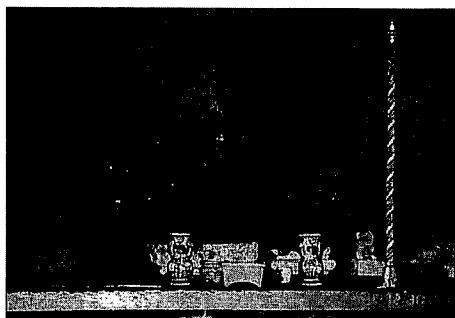


写真21



写真22 犬田布ミサキ神社の石

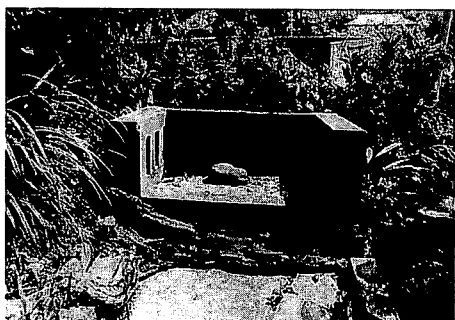


写真23

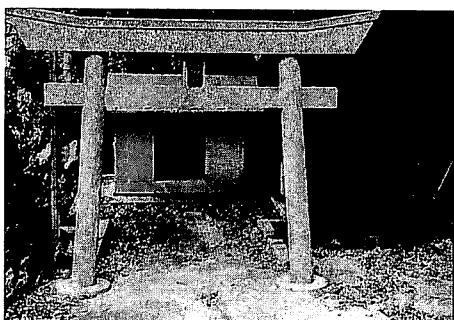


写真24 根馬神社

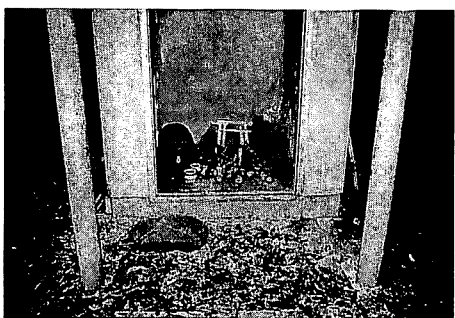


写真25 中山神社の石

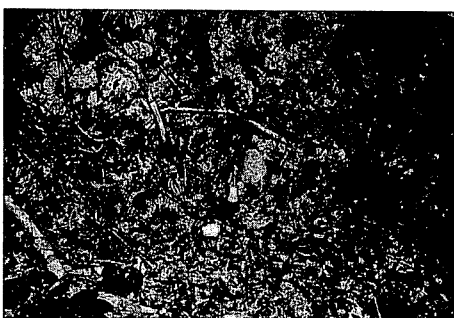


写真26 小島イシノミチの石



写真27 瀬戸内町久根津の「亀石」



写真28 瀬戸内町小名瀬のゴンゲンの石



写真29 瀬戸内町実久のイビガナシ



写真30 瀬戸内町武名のゴンゲンの石

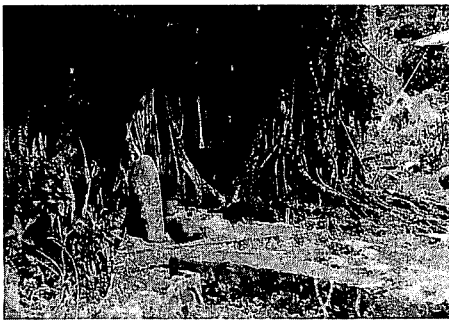


写真31 武名のシマゴスガナシ

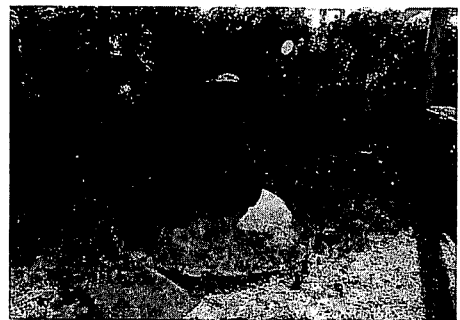


写真32 瀬戸内町須子茂のイビガナシ

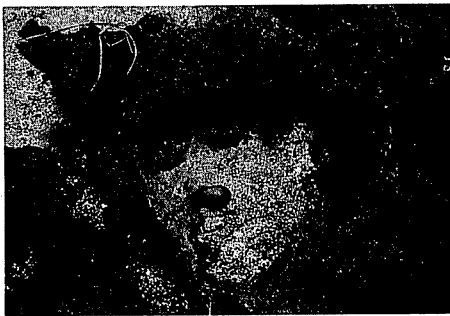


写真33 徳之島 海岸の石

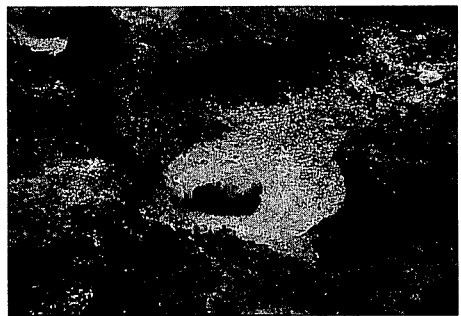


写真34 徳之島 海岸の石

さんご礁の岩盤には大きな穴があいていてそのなかに、明らかに石灰岩ではない磨耗した硬質の石が残っている（写真33～34）。おそらくこれが聖地に運ばれたのであろう。

これらの石は、徳之島町の海岸付近の墓地にも見出せる。島の東半分は改葬をしない埋葬地帯であり、白砂をしきつめたあまり広くない墓に、家族に死者が出る都度埋葬されていくのであるが、遠い祖先の墓石として、聖地におかれているような自然石が墓石のかわりに置かれているようである（写真35～38）。

松山光秀氏によれば、石には霊が宿りやすくもっとも力のある石は赤石（赤い砂岩）であるとのことである。また穂積重信氏は、川で美しい蛇紋岩を拾ってきてかざっておいたところ、母親に、「海で拾ったものならいいが川の石はどんなことに使われたものかわからず、霊が宿っているかもしれないので捨てるように」といわれた経験を持つ。

石は生きた樹木よりも長くかたちを保つ。祖霊のよりしろとして、また聖地であること目印として欠かすことの出来ないものである。

おわりに

徳之島の伊仙町において神社と名づけられた場所も含めて信仰の場所の外観や儀礼には、次の特徴がある。1) 体系的発達をとげる以前の原始的な神道と共通性がある。2) 権現や



写真35 徳之島町母間 墓地の自然石

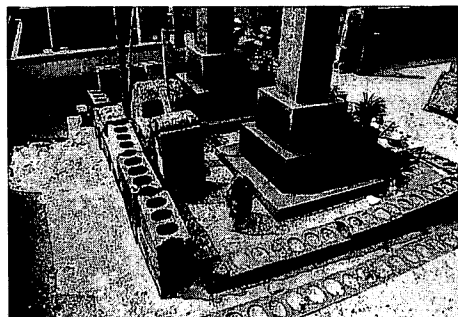


写真36 徳之島町母間 墓地の自然石



写真37 徳之島町徳和瀬 墓地の自然石



写真38 徳之島町手々の墓地の自然石（右手前）

八幡神社が多いところからして、本地垂迹思想や修験道の影響が感じられる。

1) について、内地でも無宝殿・自然奉斎形式の神社があるが、徳之島に限らず、南西諸島全域において祖霊祭祀と一般祭祀の分離が生じる以前の、霊地信仰の性格が強いという点に特徴がある。社殿がなくとも、樹木と白砂と石があればいいのである。これに対し明治以降導入された神道は、奄美諸島各地に現在でも残る「忠君愛国碑」や、境内に置かれた戦死者の墓碑が示すように、護国宗教としての国家神道である。戦後、占領政策で国家神道から神社が切り離され一時衰退したが、現在は内地から帰郷あるいは転入した人々のもたらした通過儀礼や年中行事に対応するためのものとなっている。

2) について、権現のほうは15から16世紀に琉球王朝まで伝わっていったものである。「熊野の沖から中国の補陀落山めぐして船出した僧侶も多」く、沖縄に漂着した僧侶が布教した。徳之島には、熊野から僧侶が漂着したのか、沖縄から伝わってきたのか不明である。八幡信仰のほうは、「1466年鬼界が島征伐に赴いた尚徳王が、海路に漂っていた古鏡を八幡大菩薩として祭った」³²⁾ことが事実だとすれば、権現信仰ともども沖縄から伝わった可能性がある。すなわち伝わったときから、琉球王朝下で受容され、変容した信仰であっただろう。その意味で徳之島の伝統的信仰の上にも移植されやすかったのではないだろうか。

ある信仰がその地域固有のものであるか、そうでないかを分ける基準はない。外部から入ったものであっても、時間が経過すれば、地元の信仰と一体化し、住民の生活体系と世界観に浸透していくからである。しかし起源や原型を求めることは作業仮説として必要である。さいわい時代を遡れば遡るほど他地域と共通の要素が増えてくる。文化の流れが九州から沖縄へ向かうほうが、その逆より多かつたせいで、内地との共通性がみられるようになってくる。この文化の流れは一定ではなく、断続的であったために、後から来た要素がどの順番でそれ以前の信仰の上に重ねられていったのかが比較的にわかりやすく、信仰のありかたと地域に共通する基本的な形態がみえてくるように思える。例えば文献資料のある時代に入ってきた、新しい要素から順にはぎとっていけば、文献資料の無い時代から続いてきた信仰の原型がとりだせるはずである。そして、記録の無い時代については考古学的発掘調査により裏付けが得られることでより確かな全体像がつかめるであろう。こうして浮かび上がるであろう徳之島のかつての信仰のありかたは、内地において遠く過去のものとなった文化を考える上で大きな手がかりをあたえてくれると確信する。

徳之島の場合は、徳之島町、伊仙町および天城町の社会教育課が支援し、文化財保護委員会の郷土史家や民俗研究者達が、高齢化、過疎化、都市化の波にさらされ、急速に失われつつある島の文化的伝統の保全にむけ、地道な努力を積み重ねている。この文を書くにあたり、徳之島町文化協会長の松山光秀氏には方法論上の指導を、伊仙町文化財保護委員会長の穂積重信氏には歴史資料の研究成果を提供していただいた。またこのお二人とともに徳之島町役場の正田武二氏にも、全面的に現地調査の便宜を図っていただき、さまざまな支援をしていただいた。そのほか前田初枝氏には伊仙町小島の貴重な話をきかせていた

だいた。ここから感謝の気持ちを述べたい。

注

- 1) 伊仙町立歴史民俗資料館, 「民話伝説記」, 1987, p. 18
- 2) 「伊仙町誌」, 1978, p. 603
- 3) *ibid.*, p. 442
- 4) 「民話伝説記」, p. 9
- 5) 「伊仙町誌」, p. 611
- 6) 穂積重信, 「南鳴雑録集」, 徳之島町亀津, 1995, p. 54
目加呂衆之前は天降ってきた天女が水浴びをしているあいだに, その飛衣や舞衣を隠し, 帰れなくし, 妻とした。
- 7) 現在の儀名山神社の南西数百メートルはなれたところらしい。
- 8) 目加呂衆之前のこと。
- 9) 天女のこと。
- 10) 内地からもたらされた八幡神
- 11) 「南鳴雑録集」, p. 62
- 12) 「伊仙町誌」, p. 616
- 13) *ibid.*, p. 610
- 14) 「伝説民話記」, p. 18
- 15) *ibid.*, p. 28
- 16) 「伊仙町誌」, p. 143
- 17) *ibid.*, p. 448-449
- 18) 小野重朗, 「奄美民俗文化の研究」, 法政大学出版会, 1982, p. 116
- 19) 小島 禮, 「琉球学の視角」, 柏書房, 1983, p. 132-133
- 20) 宮家 準, 「神社信仰について」, (九学会連合沖縄調査委員会, 「沖縄 — 自然・文化・社会」, 弘文堂, 1976, p. 334-335)
- 21) 松山光秀, 「神之嶺校区の文化財めぐり」, (徳之島町立神之嶺小学校, 100周年記念誌, 1996)
- 22) 酒井卯作, 「琉球列島における死霊祭祀の構造」第一書房, 1987, p. 599
- 23) 小野重朗, 「神々と信仰」, 第一書房, 1992, p. 19
- 24) 赤田光男, 「祖霊信仰」, 雄山閣出版, 1991, p. 154-155
- 25) 「神々と信仰」, p. 18
- 26) 大林太良, 「葬制の起源」, 中央公論 (文庫版), 1997, p. 178
- 27) *ibid.*, p. 206
- 28) 徳之島三町文化財保護審議委員連絡協議会, 「徳之島の墓地」, p. 29
- 29) 「葬制の起源」, p. 209
- 30) 「琉球列島における死霊祭祀の構造」, p. 107
- 31) *ibid.*, p. 127-130
- 32) 「沖縄 — 自然・文化・社会」, p. 336

Culte des Ancêtres d'Isen (Tokunoshima)

Hiroshi TAKANO

Faculté des Informatiques

Université d'Okayama pour les Sciences Naturelles

1-1, Ridai-chō, Okayama-shi, Japon

(Reçu le 5 Oct. 1998)

Les cimetières de la partie est de Tokunoshima nous montre souvent l'évolution d'institution funéraire. Il n'est pas rare de trouver de crânes moitiés cassés et un peu moisissés sous le roche calcaires au fond des tombeaux. Car on avait laisser des os de parents chers exposer sans tombeau.

Le culte des ancêtres dans cette ile est profondement lié à l'institution funéraire. Les ancêtres éloignés temporellement sont devenus dieux protecteurs du hameau entier. C'est pourquoi la plupart des lieux de culte se trouvent tout près de cimetières abondonnés ou comme le cas du hameau Neema, encore en usage pour arranger uniquement des crânes.

La croyance de la supériorité spirituelle de femme a donné privilège aux prêtresses sous le royaume Ryūkyū. Mais ces prêtresses ont été réprimées par la suite sous la domination Satsuma. Et de nombreux légendes de lieux sacrés qui parlent de la mort d'une belle femme maltraitée preuvent une sorte de traumatisme historique.